

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：34533

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24616024

研究課題名(和文) 定常型社会におけるケアとそのシステム

研究課題名(英文) Care and its system in the stationary state society

研究代表者

紀平 知樹 (KIHIRA, Tomoki)

兵庫医療大学・共通教育センター・教授

研究者番号：70346154

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、環境問題とケアの問題は相互に独立した問題ではなく、むしろ共通の根をもつものであるという観点から、新たな社会のあり方を模索することを目的としていた。そのために生産志向の社会から定常型社会へ、そして生産へと方向付けられたケアから新たなケアのあり方について検討することを課題としていた。本研究では、定常型社会において、生産活動に対して一定の制約を課すために強い予防原則が必要であることを明らかにした。またケアについては、ケアを支える健康に関する政策、特にヘルスプロモーションの意味について問い直す必要があることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research project aims at searching for the possibility of new society from the view point that environmental problem and the problem of care is not independent problem, but they have a common root. In order to achieve that aim, we should considerate the shift change from production oriented society to stationary state society, and also production oriented care to alternative care. In this research, we clarify that the precautionary principle is the necessary condition in order to restrict on the activity of production. As concerns care, we elucidate that we should redefine the meaning of health promotion that is a background of the care.

研究分野：倫理学

キーワード：ケア 間主観性 定常型社会 ヘルスプロモーション 予防原則

1. 研究開始当初の背景

(1) 環境問題とケアの問題は現代社会が直面する大きな問題である。この二つの問題はまったく別々の問題ではなく、むしろ根底においてつながった問題であるといえる。そうした視点をもつことで、新たな社会が進むべき方向を探求しようという試みが、散発的に行われている。

(2) その中の代表的な論者である広井良典は現代社会を生産過剰の時代と規定し、そのことによって、過剰による貧困という逆説的な問題が生じているという指摘を行っていた。そして解決のために、過剰の抑制と富の再分配を行わねばならないと主張する。それを実現するのが定常型社会であるという。この定常型社会は、19世紀イギリスの思想家ジョン・スチュワート・ミルによって提唱されたものである。この概念を現代の環境問題との関連で取り上げ直したのはハーマン・デイリーである。しかし、この定常型社会の具体像については未だ十分に議論が尽くされていないという状況である。

(3) 他方、ケアに関連する問題としては、健康転換という注目すべき見方がある。たびたび、感染症から生活習慣病への移行に関連して疾病構造の変化という概念に言及されることがある。しかし、この疾病構造の変化は、ある意味では結果にのみ注目した見方であるといえるだろう。そしてどのようにそのような結果が生まれたのかということを考えるなら、人口構造や就業構造といった経済社会全般をその視野に含めるべきであり、健康転換とは、そうした社会全般の変化を総合的に捉えていこうという考え方である。

(4) こうしてみると、環境問題とケアの問題は、従来の生産中心型の社会に対するアンチテーゼを突きつける問題であることがわかるが、それでは、生産中心型社会に変わる社会とはどのような社会なのか、そのことについては不透明である。

2. 研究の目的

(1) 本研究では以下の三つの問題を解明していくことを目的とした。

成長型社会から定常型社会への転換の条件

健康転換によるケア関係の変化に関する問題

ケアを支えるエートスとシステムの構築である。

(2) の「成長型社会から定常型社会への転換の条件」では以下のことを明らかにしようとした。J.S.ミルは『経済学原理』のなかで富の成長は無制約なのではなく、終着点をもつと考え、それを定常状態と名付けた。そこでは富の量的な増大は停止するが、質的

な改善が生じる。このミルの思想に影響を受けているのが環境経済学者のハーマン・デイリーである。彼はミルの思想を引き継ぎながら、定常状態を持続可能な発展の状態であると主張している(Herman Daly, *Beyond Growth The Economics of Sustainable Development*, Beacon Press, 1996)。彼らに共通するのは、生態学的有限性の認識である。そしてデイリーは経済システムを生態系のサブシステムと位置づけ、そこから無限の経済成長という理念を退ける。彼の立場は「強い持続可能性」といわれるが、しかし必ずしも多くの賛同を得ているわけではなく、主流は自然資本と人工資本の無限の代替を認める弱い持続可能性である。したがって、まずは弱い持続可能性の立場を退ける必要がある。そして、そうした社会では、従来は市場的価値を持たないと見なされていたものの価値が見直されることになる。たとえば一般的に投資といえば現在の生産能力を増大させるために資本を投下することであると理解されるが、デイリーによれば定常型社会では、「待機すること」が自然への投資となるという。こうした諸概念の再定義に取り組みねばならない。

の「健康転換によるケア関係の変化に関する問題」では以下のことを明らかにしようとした。

健康転換では、三つの層が区別される。第一層は感染症の段階であり、第二層は慢性疾患の段階であり、第三層は老人退行性疾患である。現在は第二層から第三層への移行にあるといえる。この変化において重要なのは、「治療が適切な対処ではなく、むしろそれが「生活の質」を低めることになる場合がある」(広井良典、『ケア学 越境するケア』、2000年、36頁)ということである。そして第三層においては医療と福祉の連携と生活を基軸にしたケアが求められる。

以上の点から考えなければならぬのは、従来の医療施設の中でのケアではなく、むしろ生活の中でのケアという問題である。それは医療職者や福祉、介護職者の連携の問題が浮上する。現在の医療教育においてもチーム医療の重要性が説かれているが、必ずしもそれが実質化しているわけではない。したがって、多職種協働をどのように促すか、そしてそうした連携においてどのような問題が生じるかを明らかにする必要がある。

他方生活の中でのケアを実現するコミュニティのあり方も検討しなければならない。孤族という言葉が示すように、経済活動以外の部分での人と人とのつながりが希薄になっている。こうした失われたつながりを再構築するコミュニティのあり方を明らかにする。

の「ケアを支えるエートスとシステムの構築」では以下のことを明らかにしようとした。われわれが定常型社会というモデルを受け入れることができるなら、そのときケアの意

味にも変容が訪れるはずであり、その意味を明らかにする。ケアが十分かどうかということに関連して、QOL 評価が用いられる。しかしこの評価自体が経済社会における生産性の概念の枠組みにとらわれているという批判がある (cf. J. Fletcher et.al, *Harming Patients in the Name of Quality of Life, First, Do No Harm*(N. Diekelmann ed.), 2002, The university of Wisconsin Press)。ケアが人間の基本的なあり方だとするなら、生産性とはその一部にすぎない。従って生産性を高めることに限定されないケアの意味を明らかにし、そしてそのようなケアを可能にする社会システムのあり方を提示する。

3. 研究の方法

研究は文献研究を通して行われた。定常型社会に関する理念については、持続可能な開発をめぐる論争に関する文献調査等が行われた。ケアに関連しては、北欧におけるケアのあり方、社会システムに関する文献調査が行われた。ケア関係の変化やケアのシステムについても文献資料の検討が行われた。

4. 研究成果

(1) 初年度である平成24年度は、この研究課題で考察すべき問題点を明らかに出すということを主たる目的として研究を行った。研究代表者の紀平は、日本現象学会のワークショップにおいて、現象学の立場から、市場を至上のものとするような社会の限界と持続可能な社会の可能性についての報告を行い、参加者たちと意見交換を行った。特に日本では、江戸時代から明治時代への転換期に地租改正が行われ、そのことが共有地のあり方に大きな変化を引き起こしたことを「小繋事件」の経緯を紹介しながら考察した。それはまさに村民たちの生活を成立させるための基盤であった小繋山に、市場経済のシステムが浸透し、商品として対象化された山へと変化していく過程であるということを示した。また、二度の研究会を開催した。一度目は研究代表者の紀平が定常型社会の理念について報告を行った。そしてこの定常型社会では、生産性という理念の組み替えが必要であることを明らかにした。また研究分担者の浜渦は、吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』を取り上げて、人間関係を生産関係としてみる視点を批判しつつ、ケア関係の意味について考察を行った。またこの研究会では、作業療法を専門としている稲富宏之氏を招き、作業療法の理念やその方法についての知識提供を行っていただいた。二度目の研究会では、研究分担者の大北が、HIVコミュニティのあり方と公衆衛生との関連について報告を行った。浜渦が、ドイツにおける事前指示のあり方についての報告を行った。

(2) 平成25年度は主として文献研究を通して成長志向社会から定常型社会への転換を導く思想の検討を行った。また地域コミュニティでのケアのあり方について、一般の市民も参加可能な研究会を開催した。

文献研究では、フランスの思想家、セルジュ・ラトゥーシュの「脱成長」という理念を取り上げ、その理念の由来や目指す社会を批判的に検討した。彼の思想はイヴァン・イリイチのコンヴィヴィアリティやサブシステムといった概念から大きな影響を受けており、またひいてはカール・ポランニーのサブスタンスとしての経済という構想にまでさかのぼって関係づけることができるだろう。しかし彼らの思想は、市場経済の限界を指摘するものとしては非常に鋭いが、その反面、現代の社会の中でいかにサブシステムを確保することができるかが今後の研究課題として明らかになってきた。

(3) 定常型社会を見据えた上での社会と市場の関係については、カール・ポランニーの指摘にもあるように、経済システムに埋め込まれた社会を、再び逆転させ社会の中に経済を位置づけることが必要であることは明らかであるが、しかし、現在のようにあまりにも経済システムが広く浸透した社会においては社会の中に経済を埋め込むための新たな語彙体系の創出が必要であることが明らかになった。

(4) 定常型社会においては、生産活動に一定の制限が課せられると考えられるが、そのための原則として予防原則についての考察を行った。リオ宣言において予防原則は環境破壊を回避するための重要な原則として提示されているが、しかしその内実はいわゆる曖昧であり、必ずしも統一的な解釈が行われているわけではない。本研究課題では、この予防原則を持続可能な開発の下位原則と考え、定常型社会における予防原則の意味を明らかにした。すなわち、持続可能な開発に関する論議では、強い持続可能性と弱い持続可能性の二つの解釈がありうるが、定常型社会では、ハーマン・デイリー等が主張する強い持続可能性の解釈が妥当である。そうすると、予防原則もこの強い持続可能性と親和的なものでなければならない。そうすると、予防原則の解釈の中でも、強い予防原則とよばれているウイングスプレッド声明のような解釈が妥当ではないかということを示した。

(5) ケアというものが、人々の健康と密接に関わるものであることはいままでもないであろう。そして生産志向の社会では健康は生産的であるための条件であると考えられる。そして、1970年代頃から主張されるようになったヘルスプロモーションは、自己の健康をコントロールすること、そしてそれは

ある種の社会的投資であることをヘルスプロモーションに関する文献研究から大北が明らかにした。そして超高齢社会を迎えた日本においては、新たなヘルスプロモーションの方向性を示す必要があることを示した。

(6) 本研究は「定常型社会におけるケアとそのシステム」という課題のもとで従来の生産志向の社会とは別の社会を探索する研究であった。そして上述したように、その可能性を一定程度垣間見ることができたのではないと思われる。しかし他方、様々な課題が山積していることも確かである。すでに述べたことではあるが、市場経済が世界の隅々にまで浸透した現代において、サブシステムをいかにして確保すべきだろうか。また、市場経済を批判する語彙が、すでに市場経済に深く根をはった語彙であることによって、市場経済を批判することはきわめて困難であり、新たな語彙体系を見いだす必要があるだろう。さらに、ヘルスプロモーションというある意味では批判の余地のないように思える概念についても、定常型社会においては新たな意味づけが必要ではないかということである。こうした問題を引き続き考察していく必要があるということが明らかになったことも、本研究の成果の一つであるといえるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

横田恵子、大北全俊、「HIV/AIDS カウンセリング」概念の軌跡 1990年代の心理カウンセリングの政治性とHIV/AIDS医療とのかかわりから、臨床哲学、査読あり、17号、2016、pp.53-76、<http://www.let.osaka-u.ac.jp/clph/pdf/vol117.pdf>

浜過辰二、グリーンケアのために-臨床哲学からのアプローチ-、グリーンケア、査読無し、第4巻、2016、pp.3-18

浜過辰二、生老病死と共に生きる-ケアの臨床哲学に向けて-、哲学、査読無し、66巻、2015、pp.45-61

紀平知樹、物語としての全人的苦痛、兵庫医療大学紀要、査読有り、2巻、2014年、pp.7-17

大北全俊、Uncertain Risk, Public Health, and Ethics: Considering the Ethical Framework for HIV Prevention Strategy, Journal of Philosophy and Ethics in Health

Care and Medicine, 査読有り、8, 2014、pp.61-87

浜過辰二、尊厳死を法制化するとは、何をすることなのか?-日本とヨーロッパ3国の比較考察-、メタフシカ、査読有り、45号、2014年、pp.1-14

紀平知樹、吉永明弘、河野哲也、環境問題への現象学の寄与、現象学年報、29巻、査読無し、2013年、pp.43-49

横田恵子、大北全俊、ソーシャルワーク専門職定義の変遷と現状-社会倫理学・政治思想的含意に関わる一考察、神戸女学院大学論集、査読無し、60-1、2013年、pp.207-214

浜過辰二、ケアを支えるシステムについての一考察、文化と哲学、査読有り、30、2013年、pp.39-56

[学会発表](計9件)

紀平知樹、環境問題と現象学、日本現象学会第37回研究大会、招待講演、2015年11月8日、同志社大学新町キャンパス(京都府京都市)

浜過辰二、生老病死と共に生きる-ケアの臨床哲学に向けて-、日本哲学会第74回大会、招待講演、2015年5月16日、上智大学四ツ谷キャンパス(東京都千代田区)

浜過辰二、事前レクチャー「いつかくる死のことを考えておきたい」、第22回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会、2014年7月12日、神戸ポートピアホテル(兵庫県神戸市)

浜過辰二、Caring and Phenomenology-From Husserl's Phenomenology of Intersubjectivity、The 6th International Conference of P.E.A.C.E.、2014年5月23日、The Chinese University of Hong Kong(Hong Kong, China)

浜過辰二、Caring und Phänomenologie-Aus der Sicht von Husserls Phänomenologie der Intesubjektivität、Internationale Tagung des Husserl-Archivs Köln im Zusammenarbeit mit der Deutschen Gesellschaft für Phänomenologische Forschung、2013年9月28日、Universität zu Köln(Cologne, Germany)

紀平知樹、Ethical Issues in Precautionary Principle, International Conference on Bioethics and Ethics of Science、2013年8月29日、Kushiro Tourism and International Relations

Center (Kushiro, Hokkaido)

浜渦辰二、医療と福祉をつなぐケア学、鳥取県福祉研究学会第6回研究発表会、2013年2月23日、鳥取県立福祉人材研修センター(鳥取県鳥取市)

紀平知樹、環境問題と生活の基盤の危機、日本現象学会第34回研究大会、2012年11月18日、東北大学川内北キャンパス(宮城県仙台市)

大北全俊、健康増進の動きとそれへの応答について-M.フーコーの思索を手がかりに-、日本医学哲学・倫理学会、2012年11月17日、金沢大学鶴間地区(石川県金沢市)

〔図書〕(計3件)

浅井篤、大北全俊、日本看護協会出版会、少子超高齢社会の「幸福」と「正義」：倫理的に考える「医療の論点」、2016年、212

末廣謙、紀平知樹、常見幸、医療概論、二瓶社、2014年、141(pp.96-124)

浜渦辰二、シリーズ『生命倫理学』第14巻「看護倫理」、丸善、2012年、259

6. 研究組織

(1) 研究代表者

紀平 知樹 (KIHIRA Tomoki)
兵庫医療大学・共通教育センター・教授
研究者番号：70346154

(2) 研究分担者

浜渦 辰二 (HAMAUZU Shinji)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：70218527

大北 全俊 (OKITA Taketoshi)
東北大学大学院・医学系研究科・助教
研究者番号：70437325